

令和 5 年 5 月 15 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2022

課題番号：19K01198

研究課題名（和文）技術・制度・環境の連環からなる世界への人類学的・哲学的アプローチ

研究課題名（英文）Anthropological and philosophical approaches to a world consisting of a linkage of technologies, institutions and the environment.

研究代表者

山崎 吾郎（Yamazaki, Goro）

大阪大学・COデザインセンター・教授

研究者番号：20583991

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本プロジェクトでは、文化人類学と哲学の共同研究により、制度や技術が「第二の自然」として立ち現れる事象を分析し、従来の構造主義やポスト構造主義における議論への新たな解釈の可能性を探究した。その活動により、雑誌論文等での成果発表に加え、共同研究体制の整備を進めた。主な成果物として、最終年度に関連する研究者をくわえて論文集『構造と自然』を出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

哲学と文化人類学の共同研究を活性化させ、本プロジェクトから派生した別の新たな研究プロジェクトが立ち上がった。20世紀を通じて哲学と文化人類学に相補的な学術的交流があったことを明らかにし、それが今日の理論的課題に通じていることを示した。

研究会をオンラインで開催したことにより、広く研究内容を一般に開いた形で示すことができた。また、論集の出版により、広く読者に成果をアピールすることができた。

研究成果の概要（英文）：Through joint research between cultural anthropology and philosophy, the project analysed events in which institutions and technologies emerge as 'second nature' and explored the possibility of new interpretations to the conventional structuralist and post-structuralist debates. Through these activities, in addition to the publication of papers and other results, an environment for conducting joint research was developed. The main output of the project was the publication of a collection of papers, "Structure and Nature" (Keiso Shobo, 2022), with related researchers in the final year of the project.

研究分野：文化人類学

キーワード：構造主義 自然と文化 環境 制度 技術

1. 研究開始当初の背景

新しい技術の導入は、人間社会のあり方をたびたび大きく変化させてきた。しかしその変化は、技術決定論のような一方向的な因果関係で説明できるものではない。とりわけ現代社会では、新しい科学技術の社会的受容に際して、一方でそれが経済成長や利便性の向上につながることもあれば、他方で倫理的諸課題や新たなリスクを生み出すというように、技術の両義性を考慮することが不可欠となっている。こうした技術の両義性について、環境や制度を巻き込んだ相互的な変容プロセスを明らかにする必要がある。本研究では、こうした関心に対して、技術 制度 環境の間の独特の連環から生まれる新しい概念に着目することで、技術を相互変容のプロセスのなかに位置づけてとらえる。そのことで、新技術の社会的受容がもたらすさまざまな問題を、制度の変化、身体経験の変容、さらには自己認識の変容を含めたひとつのパースペクティブのなかで理解するための方法論的な検討を、文化人類学、哲学の共同研究として行う。

2. 研究の目的

技術 制度 環境が作り出す連環のなかで人間と社会のあり方を考察し、技術の導入にともなってしばしば実践上の混乱がみられる具体的な事象に対して、有効な研究手法および研究体制を構築することを目的とし、特に以下の三点を検討する。

1. 近年の科学技術の広がりやその影響力の大きさに鑑みて、申請者が専門とする文化人類学における技術論を起点としながら、異分野との共同研究の道を模索する。とりわけ本研究では、文化人類学と哲学との共同研究に主眼を置く。
2. 研究代表者の山崎、研究分担者の山森が、それぞれ事例研究に取り組むことで、具体的な概念創出の特徴を明らかにし、事例間の比較の可能性について検討する。
3. 人文学的な技術論の観点からアプローチする起点を作り出すことで、将来的により広いテーマについて、より大きな共同研究を可能にする基盤作りを目指す。

3. 研究の方法

基本的なテキストの読解を通じて、概念史的なアプローチを進める。同時に、事例研究について各自が国内外での文献調査・現地調査を実施する。研究成果を共同でまとめることで、さらなる共同研究を生み出す知的基盤を創出する。

事例研究として、山崎は過疎地域における自然の秩序と社会の秩序の絡み合いをとりあげ、山森は、主に精神医療施設での調査を行う。

4. 研究成果

4年間のプロジェクト期間中、雑誌論文4件、学会発表10件、図書の出版7件の成果があった。

プロジェクト開始以降、2019年度は、月に1回のペースで研究会を実施し、共同研究者とともに研究プロジェクトの方向性の確定、および基本的な問題意識の共有を図った。現代哲学に対する人類学の影響を検討することを関心の出発点とし、そこから検討すべき文献、事例、そして成果物のイメージ(出版・公刊の媒体)について確認した。とりあげた主なテキストは以下のとおり。T. Ingold "Perception of the Environment"、L.H.モーガン『古代社会』、C.レヴィ＝ストロース『神話論理』、C.レヴィ＝ストロース『われらみな食人種』、E.ヴィヴェイロス・デ・カストロ『食人の形而上学』、C.レヴィ＝ストロース『親族の基本構造』。これらは、いずれもジル・ドゥルーズ『アンチ・オイディプス』の第1章の読解に深く関わっており、ドゥルーズの当該テキストを参照点とした共同研究を進めていく意義とその重要性を確認した。また、これに付随して、文化人類学のほかに精神分析の近年の議論と問題意識が哲学および人類学に与えた影響の重要性が明らかとなった。

2020年度は、対面での研究会を月に1回、合計12回実施し、レヴィ＝ストロース『神話

論理』をはじめ、基本的なテキストの検討を引き続き行った。オンラインの研究会を通じて、哲学、人類学に加えて、社会学や科学技術社会論といった近接分野の研究者との接点が生じ、「現代人類学と哲学の知的交錯」をテーマとした論集の企画について検討する機会が生まれた。また、本プロジェクトから派生するテーマ系として、現代の人類学と哲学とが向き合う問題に「マジョリティ論/マイノリティ論」の再考があることについて、共通する問題意識が生まれ、本プロジェクト終了以降の新たな研究テーマ、ないしは発展的継続のアイデアを得ることができた。

2021年度は、予定どおり対面の研究会を月に1回、計12回実施した。加えて、前年度に構想がはじまった本科研の成果となる論文集の出版準備を進め、研究会、打ち合わせを行った。そのほか、日本法哲学会にて「現代人類学からの「法と感情」へのアプローチ」と題した報告を行ったことで、人類学と哲学の接点の一つとして情動へのアプローチがあること、またそれが本研究課題で扱ってきた技術・制度・環境と密接な関わりをもった主題となることが明らかになった。さらに、現代日本における人類学と哲学の共同研究の可能性について、とりわけ三木清の技術論、制度論にその萌芽がみられることについて、研究会で報告を行った。

2022年度も対面での研究会を継続的に実施し、成果物となる論集の原稿の執筆およびその相互検討を行った。論集には、本科研プロジェクトのメンバー二名に加えて、哲学・文化人類学の研究者数名を著者が新たに加わることになり、この間行ってきた研究活動を、プロジェクトを超えて展開させることができた。論集は、檜垣立哉・山崎吾郎編『構造と自然：哲学と文化人類学の交錯』として、勁草書房より2022年12月に出版された。同成果物の出版後、さらに発展的な研究プロジェクトの企画・構想を行い、新たにメンバーを加える形で、哲学と人類学の共同研究を組織し、科学研究費補助金(基盤B)の準備を進めた。そこでは、技術と制度について、異なる時間スケールを想定した複合的な秩序の解明が必要になることを研究主題として設定し、研究体制の整備を進めた。2022年度中に発表できなかった二つの研究テーマについて、翌年に予定されている国際会議、European Network of Japanese Philosophy(ENOJP)と International Union of Anthropological and Ethnological Sciences(IUAES)での発表準備を進めた。研究期間全体を通じて、哲学と人類学の共同研究の足場が構築されたことは、今後の活動を進めるうえでも大きな成果であったといえる。

実施期間中、2020年度は新型コロナウイルス感染症の影響によりプロジェクトの計画変更を余儀なくされたが、オンラインでの研究会の実施へと速やかに移行したことで、対面とオンラインを合わせて計44回の研究会を実施した。本科研での取り組みを足掛かりにして、2つの共同研究プロジェクトが新たに立ち上がることになり、当初目的としていた文化人類学と哲学の共同研究の基盤整備については、大きな進展があった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 工藤充・山崎吾郎・水町衣里	4. 巻 6
2. 論文標題 対話ワークショップを通じた高度汎用力教育：自動運転技術の倫理的側面をテーマとして	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 CO* Design	6. 最初と最後の頁 33-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 山崎吾郎	4. 巻 2021年度
2. 論文標題 現代人類学からの「法と感情」へのアプローチ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 法哲学年報	6. 最初と最後の頁 83-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山森裕毅	4. 巻 7
2. 論文標題 スキゾ分析と反精神医学	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 hyphen	6. 最初と最後の頁 4-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 山森裕毅	4. 巻 50(15)
2. 論文標題 中井久夫と回復のマイナー科学	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 87-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計10件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 山崎吾郎
2. 発表標題 現代人類学からの「法と感情」へのアプローチ
3. 学会等名 2021年度日本法哲学学会学術大会（統一テーマ報告「法と感情」）（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山崎吾郎
2. 発表標題 哲学的人間学と人類学：三木清『構想力の論理』を読む
3. 学会等名 京都学派およびポスト京都学派における科学哲学および技術哲学研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山森裕毅
2. 発表標題 特定質問
3. 学会等名 シンポジウム「ドゥルーズと法の問題 批判と創造」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Goro Yamazaki
2. 発表標題 Collaborative project for research and education :a case of autonomous vehicle project
3. 学会等名 Community Engagement for Teaching and Research（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Goro Yamazaki
2. 発表標題 Automated vehicle systems and hope for the revitalization of a depopulating area in Japan
3. 学会等名 IUAES (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山崎吾郎
2. 発表標題 医療の「現場」を問い直す：ある医療人類学の視点 (RTD「医療現場のフィールドワークの新しい視座」)
3. 学会等名 日本保健医療社会学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山森裕毅
2. 発表標題 「リトルネロについて私が知っている二、三の事柄」
3. 学会等名 ガタリ国際ワークショップ～リトルネロをめぐる～ (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山崎吾郎
2. 発表標題 共創における「参加」を問い直す
3. 学会等名 知識科学に基づくイノベーションデザインセミナー (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 山崎吾郎, 一方井祐子, 工藤充, 友尻大幹
2. 発表標題 開かれた知識創出・共有の場はいかに作られるか
3. 学会等名 科学技術社会論学会 第21回年次研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 山森裕毅
2. 発表標題 フェリックス・ガタリにおけるイェルムスレウ言語理論の理由と展開
3. 学会等名 イェルムスレウとフランス現代思想
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 石原孝二・斎藤環ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 200
3. 書名 オープンダイアログ：思想と哲学	

1. 著者名 松本 卓也、武本 一美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 300
3. 書名 メンタルヘルスの理解のために	

1. 著者名 志水 宏吉、河森 正人、栗本 英世、檜垣 立哉、モハーチ・ゲルゲイ、木村友美、藤目ゆき、山本ベバリーアン、澤村信英、稲場圭信、渥美公秀、宮前良平、山崎吾郎、山本晃輔、藤高和輝	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 340
3. 書名 共生学宣言	

1. 著者名 大阪大学COデザインセンター、八木絵香、水町衣里	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 216
3. 書名 つながり を創りだす術	

1. 著者名 松村 圭一郎、中川 理、石井 美保	4. 発行年 2019年
2. 出版社 世界思想社	5. 総ページ数 224
3. 書名 文化人類学の思考法	

1. 著者名 納富 信留、檜垣 立哉、柏端 達也	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 232
3. 書名 よくわかる哲学・思想	

1. 著者名 檜垣 立哉、山崎 吾郎	4. 発行年 2022年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 260
3. 書名 構造と自然：哲学と人類学の交錯	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	山森 裕毅 (Yamamori Yuki) (00648454)	大阪大学・COデザインセンター・招へい教員 (14401)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------